



今、何秒で

濡れた？

R18

全部、数えて暴いてやる

1

第一話 敵地の砂時計

水で音が覚めた。

知らない天井だった。低い木の梁が渡してある。畳の匂いがした。

七海は身を起こした。頭の芯が重い。

（ここ、どこ）

薄暗い。障子の向こうがぼんやり白い。雨の匂いがした。湿った空気が肌にまとわりついてくる。指先がふやけたみたいだった。

体の節々が重い。潜ったあとの鉛みたいな疲れだ。でも装備はどこにもない。着ているのは潜水インナーだけ。誰かが上着を脱がせたらしい。素肌にいぐさがちくちく触れた。

棚では古い時計がいくつも時を刻んでいる。
ぜんまい式。振り子。水時計。どれも少しずつ
違う速さで動いていた。ここだけ時間の流れ方
がおかしい。

その真ん中に、伏せられた砂時計が一つ。そ
れだけが止まっていた。

「起きた」

声のほうを見た。

識が湯呑みを持って座っていた。黒いエプロ
ン。まくった袖。細くて長い手が湯呑みの縁を
なぞっている。

「……しき」

「三十時間も寝てた。潜水のあとの疲れを甘く見すぎ」

淡々と言う。責めてはいない。ただ事実をそこに置く。昔からこの幼馴染のやり方だった。

「平気。もう平気だから」

「脈がまだ速い」

識の目が七海の首筋で止まった。瞬きがない。

測られていると思った。

昔からそうだ。海に潜れば何秒潜ったか、熱を出せば何度あるか。識はいつも数えて手帳に書いた。変なやつだと思っていた。今も思っている。

子どものころ、七海はよく防波堤から飛び込んだ。識は飛び込まなかった。代わりに岸で秒を数えていた。海から上がるたび、何秒だったと教えてくれる。それが挨拶みたいなものだった。ずっと見られていたことに、七海は一度も気づかなかった。

ここは識の店だった。祖父から継いだ古い骨董屋。その奥の茶室らしい。棚には湿度計だの古い時計だのが並んでいる。畳の端に藍色の絹のスカーフが無造作に置いてあった。どこかで見た色だった。

「港で倒れたんだ。宗さんが運んできた。心

配してたぞ」

心配、という言葉がうまく身に入らなかった。

倒れた自覚もない。ただ次の潜水のことばかり
頭に浮かぶ。

「……仕事は」

「休めってさ。試験まであと七日だろ」

その言葉で頭が冷えた。

潜水士の学科試験。現場では誰にも負けない。
素潜りも送気も混合ガスも体が覚えている。な
のに紙の上では三度落ちた。分圧も法令も頭に入
らない。受からなければ来季のリーダーはな
い。潜れなくなる。海のない自分を、七海はう

まく思い描けなかった。

七海は畳に手をついた。

「頼みがある」

「言ってみ」

「勉強を見て。ここ静かだし」

識が湯呑みを置いた。かたん、と乾いた音がした。

その手が棚から何かを取る。

砂時計だった。古い。硝子が少し曇っている。

上の玉に白い砂が満ちていた。

「俺のやり方でいいなら」

識が砂時計を畳に伏せた。まだ落とさない。

「十五分だけ。これが落ちるまでに覚えたことを全部言えたら合格。言えなかったら」

「言えなかったら？」

「俺が確かめる。お前がほんとに集中してるか」

意味が分からなかった。ただ識の目がいつもより暗いことだけ分かった。

外で雨脚が強くなる。茶室の湿度がじわりと上がった。障子の紙がしっとり湿気を吸っている。

七海は頷いた。現場と同じだ。やると決めたらやる。

「分かった。やる」

識の指が砂時計を立てた。

さら、と白い砂が落ちはじめる。

（十五分。楽勝）

そう思ったのは、はじめのうちだけだった。

「高気圧障害。減圧症の分類を言ってみ」

識が後ろへ回った。背中に胸がつく。息が耳にかかった。畳に膝をついた七海を、彼が背後から囲う形だった。膝と膝の間はもう、拳ひとつ分もない。

「……ベンズ。チョークス。あと」

「あと？」

「……ス、ステーグル」

長い指が横から顎を捉えた。上を向かされる。

曇った硝子の中で、砂がもう三分の一落ちていた。

「集中して。まだ半分もある」

声が優しい。優しいのに逃げ場がない。手が首筋を撫でおろす。潜水インナーの襟ぐりを、つ、となぞった。

「し、しき。それ勉強じゃ」

「勉強だよ。お前の脈を測ってる。今、跳ねた」

(測るって、なに)

インナーのジッパーに手がかかる。じ、と半分だけ下ろされた。脱がされはしない。乱されるだけ。晒された胸のふくらみを、手のひらが下からすくった。

手のひらは乾いていて、少しひんやりしていた。骨董を扱う手だ。その手が肌の熱を吸って、じわじわ温まっていく。

（なんで、こんなに意識しちゃうんだろ）

「つ、ぎ。窒素酔いの」

「言いながらでいい。止めないよ、俺は」

ちゅ、と首筋に唇が落ちた。ちゅっちゅっちゅっ、と続く。七海の肩が跳ねる。

うなじに識の息がかかる。乾いた唇が首の後ろをゆっくり這った。ぞく、と鳥肌が立つ。

（耳、弱いのか、なんで知ってるの）

「や、まって。こんなの聞いてな」

乳首をつままれた。くにゅ、と転がされる。
こねこねこね、と芯を潰される。

「ひぁっ!? やっ、そこは」

「ここ、勉強の邪魔？ ぷっくりしてきた」

こりこりこり、と先をなぶられる。腰の奥が勝手に疼いた。太腿を擦り合わせてしまう。

（やだ、なんで、ただの勉強なのに）

「腿、閉じてる。ばれてるよ」

もう片方の手が下りていく。インナーの股布の上から、ぐ、と押された。

「濡れてる」

事実を置かれた。それが一番恥ずかしかった。

棚の湿度計に識が目をやった。丸い硝子の中で針が右へ振れている。

「梅雨だな。今日は湿度、八十を超えてる」

「なに、いきなり」

指を割れ目からいったん離す。とろ、と糸を引いた。その指を七海の目の前にかざす。

「湿度計より、お前のほうが正直だ。ほら、八十どころじゃない」

(見せ、ないで、そんなの)

指先の蜜が、灯りにぬらりと光った。七海は顔をそむける。

「言ってみ。窒素酔いの症状。言えたら、ここはやめてやる」

布の上を指がなぞる。つ、つ、と。薄い生地が割れ目にくいこむ。ぬ、と湿った音がした。

「ちっ、酩酊、判断力の、低下っ……あうっ♡」

語尾が跳ねた。自分の声に♡が混じった。七海は口を押さえる。

(今の、なに、今の声)

「途中まで合ってる。続き」

「た、多幸福感、と、判断の、あ、あっ♡」

言いかけるたび、指がお豆をかすめる。頭の中の言葉が、ぷつ、ぷつ、と途切れていく。現場ではあんなに冴える頭が、まるで働かない。

（やだ、答えがとんじゃう）

「上手。でも一個抜けてる。もう一回」

「へ、減圧症の第一種、と」

指がまた、お豆をかすめた。言葉の途中で腰が跳ねる。

「第二種は？ ほら、続けて」

「む、り、しゃべれなっ」

わざと、と思った。分かってて抜けたと言っている。布越しの指が、割れ目の上のほうを探り当てた。お豆のところを、くにくに、と押す。

「あっ♡ や、そこ、ぐりぐりしないで」

「ここ？ ここを勉強って呼ぶことにしよ」

くちゅくちゅくちゅ、と布ごしに擦られる。じわ、と染みが広がっていく。もう答えどころではなかった。

「すごい濡れてんな。布、いらないな」

股布を横にずらされた。脱がさず、ずらすだけ。剥き出しになったそこへ指が直に触れる。ぬちゅ、と鳴った。

「ちが、これ、汗で」

「汗じゃない。まんこの汁だろ。ほら、糸引
いてる」

（言わないで、そういうの、言わないで）

指の腹がお豆を捉えた。ぬちゅぬちゅぬちゅ、
と転がされる。七海の腰が跳ねた。逃げようと
する腰を、もう一方の手が押さえこむ。

「に、げ、っ」

「逃げるなよ。まだ砂、落ちてる」

硝子の中の砂は、残り少なかった。落ちきっ
たらどうなるのか、頭のどこかで分かっていた。
分かっているのに止められない。

「あ、それ以上、いっちゃう♡」

「もうイくのか。早いな」

指の動きが速くなる。くにくにくに、とお豆を潰される。奥から新しい蜜が溢れて、指を濡らした。

「らめ、らめっ、砂、落ちる前に、あゝっ♡♡」

「いいよ。落ちる前に一回、イっとけ」

その瞬間、最後の一粒が落ちた。

同時に、七海の腰がびくんと跳ねた。指の上で、達してしまった。

「あゝ あっ♡♡」

さら、と音が止んだ。

茶室が静かになった。雨の音と、七海の乱れた息だけが残った。

識が砂時計をそっと横に倒した。指先で。時間を止めるみたいに。

「時間切れ。しかも、勉強より先にイったな」

「ち、ちが」

「今、何秒保った？ 自分で分かるか」

「わ、わかんない」

「潜水は秒で測れるのに、自分のいく時間は測れないのか」

（そんなの、数えてない）

「じゃあ、これからは俺が測る。よく覚えと

け」

「確かめる、って言ったろ。ここからが本番」

背中から抱き込まれた。畳に四つん這いにされる。腰だけ高く。インナーは着たまま。ジッパーは半分。股布はずれたまま。晒されているのは、そこだけだった。

「服、脱がさないの」

「脱がさない。このほうがお前は恥ずかしがる。今、耳まで赤い」

（そういうとこ、昔から、やだ）

背後で衣擦れがした。硬いものが割れ目に当たる。ぬる、と滑った。七海の息が止まる。

「し、しき、ほんとに入れ」

「息、止めるの癖だな。潜るときと同じ。今は止めなくていい」

ぐ、と先が沈んだ。張ったちんぽの先が、狭いところを押し広げる。

「あぁっ♡」

「はい、ぜんぶ吐いて。ゆっくり」

ずぶ、ずぶぶ、と犯される。ぬぷぬぷぬぷ、と奥へ届く。まんこが限界まで拗げられた。

入ってくるものが熱い。茶室の湿った空気より、ずっと。背中に貼りついた識の胸も汗ばんでいた。二人の境目が、どこか分からなくなる。

(あつい、なかが、いっぱい)

「んあ、あ、おっきい♡ なんでこんな」

「中、ぎゅうぎゅう。俺のをしゃぶってる。

分かる？」

「い、言わな、で」

(嘘、こんなの知らない、身体が勝手に)

腰を引かれて、また沈められた。ずちゅずちゅ

ずちゅ、と挟られる。奥をこつ、と叩かれた。

子宮口を先で押される。目の前が白んだ。

「ここ好きだろ。押すと締まる」

「あ、あ、らめ、そこ、おなかの奥っ♡」

最初はゆっくりだった。奥までみっちり埋め

て、止まる。息の整う暇もなく、また根元まで。
焦らすみたいに、確かめるみたいに。

「中の形、覚えた。ここが弱いとこだな」

「おぼえ、ないで、そんなの」

（一回ごとに、暴かれてる、全部）

ずぶ、と一度深く挟られて息が詰まる。子宮
口の、さらに向こうまで届こうとする。届くは
ずないのに、届きそうで怖い。

（そこ、だめ、しんじょう）

「大丈夫。ちゃんと測ってる。まだいける」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡、と抜き差しが速くな
る。インナーの背が汗で肌に貼りつく。曇った

砂時計の硝子に、七海の崩れた顔がぼんやり映っていた。

突かれるたび、繋ぎ目からとろりと溢れた。

太腿の内側を、生温かいものが伝う。畳に、ぽつ、と落ちる。湿った匂いが雨の匂いに混ざった。

（垂れてる、こんなに、うそ）

「顔、硝子に映ってる。見ろ」

「や、みたくな」

「泣きそうな顔。えっちだな、七海♡」

（見たくない、こんな顔、なのに目が離せない）

名前を呼ばれた。「なな」じゃなく「七海」
と。それだけで、まんこが勝手に締まる。

「今、締まった。呼ばれるの好きなのか」

「ち、ちが」

「嘘つき。ぐしょぐしょだぞ、七海♡」

抱き起こされた。背中を胸に預ける形で、膝
に乗せられる。向かい合わせの壁に、大きな硝
子戸。そこに、繋がったままの二人がまるごと
映った。

「見ろ。俺のが、七海の奥に入ってる」

「やっ、映さ、ないで」

この体位だと、もっと深く刺さる。自分の重

みで、いちばん奥まで落ちてしまう。

「ひぁ、ふか、っ、当たって」

識が空いた手を伸ばした。倒れていた砂時計を、また立てる。さら、と白い砂が落ちはじめた。

「今度はこっちの番。これが落ちきるまで、
イクの我慢な」

「む、むり。そんなの」

「我慢できたら今日はここまで。できなかったら、もう十五分」

「ずる、いっ」

「ずるくない。検証だよ。お前がどこまで保

つか」

ぐ、と下から突き上げられた。奥をこじ開けられる。

「あゝっ♡ む、り、それされたら」

「保て。まだ砂、いっぱい残ってる」

（やだ、数えないで、そんなところ見ないで）

じゅぷじゅぷじゅぷ♡、と下から穿たれる。

イきたいのにイってはいけない。腰を止めようとするほど、締めつけが強くなった。

「締まってきた。我慢してる証拠だ。えらいな、七海♡」

「ほ、褒めないで、余計っ」

汗が背中を伝う。茶室の湿気と繋ぎ目の熱で、肌がしっとり濡れていく。硝子戸が二人の輪郭に曇っていった。

「あ、あ、もう砂、どれくらい」

「見てみ。あと半分」

（まだ半分、うそ、保たない）

奥をぐりぐり捏ねられる。逃げ場のない波が腹の底で膨れていく。

「らゝめ、それ、いっちゃん、いっちゃん」

「あと少し。落ちきるまで、俺ので保ってろ」

最後のひとつまみの砂が、くびれを通り抜けていく。

「い、いいの、もう、いい?」

「いいよ。落ちた。よく我慢した」

ぱちゅぱちゅぱちゅ♡、と下から突き上げられる。ぐぽぐぽぐぽ♡、と重い音。晒された胸が上下に揺れる。乳首が硝子越しの自分にも見えた。

「乳首、つんつん。ぴくぴくしてんぞ」

「い、じ、めっ」

「いじめてない。ご褒美。よく頑張ったろ」

(ごほうび、ってなに、あたまとけ)

突かれるたび、繋ぎ目からぬちゃ、ぬちゃ、と音が漏れる。太腿を伝って畳に垂れた。締め

つけが止まらない。

「あ、また、くる♡ とまんない」

「いいよ。何回でも。俺が数えててやる」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡、と抜き差しが
激しくなった。奥を続けざまに穿たれる。七海
の背が反り返る。

「い、いく、いっちゃ、あゝ、あゝ あゝ ♡♡」

「いけ。ぜんぶ見ててやる。七海♡」

子宮口を、ぐりっと押し潰された。

「んゝ あゝ あゝ ♡♡♡」

落ちた。落ちきった。頭の中が真っ白な砂で
埋まる。びく、びくびく、と腰が跳ねた。まん

こがきゅうきゅう締めつける。

どびゅっ♡、と奥で弾けた。ビュルルッ♡、と
続けて注がれる。熱いのが子宮口に当たった。

「あ……あ……っ♡」

とろ、と溢れた。繋がったところから、白い
のがこぼれる。

識が動きを止めた。中でまだ脈打っている。

「はい、よくできました」

ゆっくり抜かれる。ずるり、と。垂れる感覚
に、また腰が震えた。

七海は畳に頬をつけた。息が上がっている。

潜水のあとより苦しい。

曇った硝子戸が少しずつ晴れていく。自分の吐いた息で曇って、体温が引いて晴れていく。それを識がじっと見ていた。まるで実験の結果でも記録するみたいに。

（なんで、こんな、幼馴染なのに）

識が、倒した砂時計をまた立てた。上の玉は空っぽだった。全部落ちきっている。

「なな」

呼び方が戻っていた。「七海」じゃなく「なな」に。

「……なに」

「窒素酔いの症状、結局言えなかったな」

「……うるさい」

識がふっと笑った気配がした。珍しい。この幼馴染が笑うのは。

汗ばんだ背に、彼が絹のスカーフをかけてくれた。藍色の。やっぱりどこかで見た色だった。乾いた布は、雨の湿気の中でほんのり温かい。

「これ……」

「昔、お前が置いてったやつ。ずっとここにある」

思い出せなかった。いつのことか。ただ、色だけが胸の奥をくすぐった。

識が水を吸んできた。冷たい湯呑みを手に握

らせてくれる。七海は一気に飲んだ。喉がからからだった。

「……のど、渴いた」

「知ってる。三十時間寝てたからな」

淡々と、また事実を置く。でも湯呑みはちゃんと二つあった。自分のぶんも汲んである。そういうところだけ、昔から変わらない。

（気づいてなかった。喉、渴いてたの）

自分の体のことすら、この幼馴染のほうが先に分かっている。少し悔しくて、少し楽だった。

識が絹のスカーフを七海の肩まで引き上げてくれた。藍色が、日に焼けた肌によく映える。

この色をどこで見たのか、まだ思い出せない。
でも嫌な感じはしなかった。むしろ、ずっと前
から知っている手ざわりだった。

「明日も十五分。逃げるなよ」

「逃げない。受かるまで」

現場ではいつも即答できる。潜る深さも抜ける
手順も迷わない。なのにこの一言だけ、少し
喉に引っかかった。

言ってから、七海は自分の言葉に少しだけ動
揺した。

（受かったら、ここに来なくなるのか）

考えかけて、やめた。

畳の上で砂はもう落ちない。上の玉はからっぽのまま。

試験まで、あと七日。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

15分だけ、俺に沈め